慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	池田彌三郎の少年時代
Sub Title	The boyhood of Ikeda Yasaburou
Author	武藤, 康史(Muto, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.154- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

池田彌三郎の少年時代

武藤　康史

池田彌三郎の自筆年譜は二つある。

一つは、昭和三十六年刊の『現代知性全集』㊻『池田彌三郎集』（日本書房）に収められた「年譜」。これは自筆とは銘打っていないが、自筆年譜としての文体で書かれている（この本の巻数表示はトビラでは(46)、奥付では㊻となっていた）。

もう一つは、昭和五十年刊の『池田彌三郎著作集』第十巻『随筆随想　付著作目録自撰年譜』（角川書店）に収められた「自撰年譜」。

私は平成十九年、池田彌三郎エッセイ選『世俗の詩・民衆の歌』（講談社文芸文庫）を編み、新たな年譜を添えた。その際、かつて自筆年譜で言及されていた新聞記事を探し、一部を引用した。

ここにその全文を紹介したい。またほかの箇所についても気づいたことを二、三書きつけてみたい。ただし、少年時代までの項目に限ることにする。年譜に注をつけることにより、池田彌三郎の少年時代をすこしでも詳しく見ることができたら……と願っている（私事にわたるが、池田彌三郎の慶應最後の年、私は国文科の三年生だった。年度末のころ池田先生に飲みに連れて行かれたことがある。慶應仲通りから脇にはいったバーで止まり木に並んだ。昭和五十五年の一月か二月……というところだろうか。あのような時期に……と身の竦む思いがする。そのころ私は池田彌三郎のよい

読者ではなかったが、やがて愛読するようになった。文人池田彌三郎の存在は大きい。その年譜は不断に検討を加えられるべきものと信ずる)。

大正十年（数え八歳）

この年、池田彌三郎の曾祖母・平野しげが亡くなった（同居していた）。『池田彌三郎著作集』の「自撰年譜」にはこの年の項に、

一〇月。曾祖母しげ八三歳で死去。

とある。ところが『現代知性全集』の「年譜」ではこの曾祖母の死去が大正八年のことになっていた。恐らくこれは誤りで、『池田彌三郎著作集』のとき誤りを正したと見ることができる。しかしその際、『現代知性全集』の「年譜」にあった追憶が削られてしまった。大正八年の項にはこう書いてあったのである（『池田彌三郎著作集』の「自撰年譜」は各行天ツキだが、『現代知性全集』の「年譜」は冒頭一字下ゲ。その体裁のまま引く）。

曾祖母死去。この曾祖母にかわいがられた姉が、私が曾祖母の死にあって泣かなかったと言っていじめたので、いきなり腕にかみついた記憶がある。かんしゃく持ちで短気であった。

姉の腕に嚙みついたのは大正十年のことだったのであろう。

大正十一年（数え九歳）

『池田彌三郎著作集』の「自撰年譜」にはこの年の項に、

六月。帝国劇場で「忠臣蔵」を見る。短気なのを心配した母の配慮であった。

とあるが、この年譜において短気とは初めて登場することばである。『現代知性全集』の「年譜」では前年の項に使った《かんしゃく持ちで短気》という言い回しをこの年に再び用い、文章の妙味が出ていたように思う。この年の記述自体、「自撰年譜」より詳しかった。

六月、帝国劇場上演の「仮名手本忠臣蔵」につれていかれた。かんしゃく持ちで短気なのを心配した母のはからいであって、忠臣蔵を、判官の短気からおこった史劇として説明して、その後も折にふれて母から短気をいましめられた。また母は北垣恭次郎「国史美談」を好んで読んで聞かせたので、いつしか歴史好きになってしまった。

『帝劇の五十年』（東宝、昭和四十一年刊）の上演年表を見ると、大正十一年の項に、

6・1　仮名手本忠臣蔵（通し）
6・25　旅姿思掛稲（永井荷風作）
　　入梅晴間空住吉（河竹黙阿弥作）

とあり、『仮名手本忠臣蔵』は六月二十四日までかと思いかけた。しかし当時の新聞広告を見ると、

帝劇六月狂言男優劇
　　毎夕四時半開演
時代劇仮名手本忠臣蔵五幕
浄瑠璃旅姿思掛稲　一幕
浄瑠璃所作事
入梅晴間空住吉　一幕

とあるので（「都新聞」六月六日付）、三本立だったのであろう。新聞を見わたすと、《「忠臣蔵」の通しとは珍らしい出し物である》との評もあったが（「都新聞」六月五日付）、正確には《三段目進物より七段目茶屋場まで》らしい（「萬朝報」五月三十一日付）。大入りで補助椅子も出たというが（「東京朝日新聞」六月六日付朝刊）、《帝劇のやうな劇場で歌舞伎劇を演るのはいけないなどと今更らしく厳しく言ふ人》もいたという（同六月四日付朝刊）。歌舞伎座は前の年

に失火から全焼しており、このころは再建中で、《歌舞伎座も先づ地鎮祭にまで漕ぎつけた》とも書いてあった（同六月二日付朝刊）。高師直、大星由良之助は幸四郎、塩谷判官は宗十郎、お軽は梅幸、勘平は羽左衛門といった配役。

このときの帝劇の「忠臣蔵」はポール・クローデルも見ていることを『歌舞伎座百年史　本文篇』（松竹・歌舞伎座、平成五年刊）から教えられた。

「年譜」には北垣恭次郎『国史美談』のことも出ていた。池田彌三郎があちこちでその愛読のほどを回想している本である。

次のように刊行された。

『国史美談』上巻（大正七年九月八日刊）
『国史美談』中巻（大正八年四月十八日刊）
『国史美談』下巻（大正九年五月十五日刊）
『続国史美談』前篇（大正十一年七月二日刊）
『続国史美談』中篇（大正十三年一月十日刊）
『続国史美談』後篇（大正十四年三月十五日刊）
『国史美談　現代史』巻一（昭和二年七月一日刊）
『国史美談　現代史』巻二（昭和十三年二月二十日刊）

すべて実業之日本社刊。著者はすべて北垣恭次郎（のみ）。トビラに見える著者の肩書は、『続国史美談』前篇までは東京高等師範学校助教授。次の本からは元教授。

『続国史美談』中篇の巻末に『国史美談』『続国史美談』の広告があり、《全国各地で課外教科書として採用されて大好評》などと書いてある。

北垣恭次郎はこのあと『国史美談』『続国史美談』に《大増補を加へ》（「序」）、全八巻の『大国史美談』を出した（実業之日本社、昭和十六年から十八年にかけて刊）。

さらに全十八巻の『趣味の日本史談』も出している（明治図書出版、昭和二十六年から三十一年にかけて刊）。巻一の巻末のこの本の広告には《かつて国史美談を執筆し、百万の読者を熱狂させた著者が、再び筆をとり》……などと書いてあり、『国史美談』の人気が偲ばれる。

その文章の見本として、短い一節を掲げてみたい。『国史美談』上巻の第二十五章「源平の戦」の最初の節の全文である（このように各節、太字の小見出しがついている。原文総ルビ、一部を生かす）。

清盛の無道　鹿谷の変より二年の後に、重盛は病気に罹り、四十二歳で薨じた。或書物には重盛は父の悪心を和げようとして、わざ〳〵熊野の社に参詣し、死を祈つた為に薨じたものの様に書いてあるが、果して其の通りか否かは分らない。併し重盛は日頃父の剛情我儘を苦にしてゐたのであるから、或は其の心配が重盛の死を早めたかも知れない。兎に角重盛の薨去は平家にとつては一大不幸で、其の後清盛は諫める者の無いのを仕合に、始終我儘を

貫く様になつた。

さて重盛薨じて後間もなく、後白河法皇は時の関白（藤原基房）等と御相談の上、重盛の領地を御取上になつた。其の頃清盛は摂津の福原にゐたが、之（これ）を聞いて大いに怒り、早速平氏を率ゐて京都に上り、関白以下法皇の近臣三十九人の職を罷めさせ、畏多くも法皇を或御殿に押込め奉つた。清盛の肝癪が如何に強かつたにもせよ、之を諫める者の無かつたことを思へば、平家には重盛以外に忠義を重んずる人は無かつたと見える。実に苦々しい事である。

この文章を母親から読み聞かされたのであろう。

北垣恭次郎の著書にはほかに『小学地理教材』『地理教授』『近世史談』『地理文庫　日本の誇』『小学地理教授書』『小学国史の指導精神』『皇国新地誌』『日本文化史談』『近代日本文化　恩人と偉業』『近代日本産業を興した人々』などがある。

『近代日本教育論集』（国土社）の第四巻『教育内容論Ⅱ』（昭和四十六年刊）によれば、北垣恭次郎は明治十年生れ。明治三十七年、東京高等師範学校卒。昭和三十四年歿。

大正十四年（数え十二歳）

『池田彌三郎著作集』の「自撰年譜」のこの年の項に、

五月。二十三日、兵庫県北部但馬地方に大地震。関東の大地震の経験などを織りこんで、見舞いの文章を書いたら『報知新聞』に載った。

とある（『現代知性全集』の「年譜」にはこのことは見えない）。

「報知新聞」を見ると、地震はこんな見出しで報じられていた。

山陰地方強震に襲はれ
城の崎豊岡方面破壊さる
今朝十一時＝各地に火災起り
死傷もある見込

これが載った紙面の欄外には《大正十四年五月廿四日》という表示と並べて《（廿三日夕刊）》と丸がっこで注記してある。つまり実際は五月廿三日夕刊として発行されたが、次の日の日付を掲げているというもの。

池田彌三郎の作文が載ったのは、このちょうど一週間後で、《五月三十一日》という表示とともに《（三十日夕刊）》と注記されている紙面。

その第八面「コドモホウチ」と銘打たれた面に「児童作品／山陰の大地震／慰問の巻／京橋泰明小学校生徒」と題し、

泰明小学二年　阿川米子
泰明小学三年　鈴木ゑい
泰明小学四年　島　玉乃
泰明小学五年　池田弥三郎
泰明小学六年　菊地福太郎

と五人の作文が並んでいる。池田弥三郎（ここでは「彌」でなくこの字が使われている）の文章全文をルビもそのまに書き写しておきたい（見出しの最初の一行はワクを含め三行ドリの大きな字になっていた。本文は行頭天ツキ。句点不使用。原態は一行十五字）。

御恩返し

震災時を思ひ
今頃はどうして
泰明小学五年
池田弥三郎

五月二十三日、午後三時頃、ごうがい〳〵といふ、けたゝましい声に、おどろいて外に飛出し、その号外をよん

で見ると、今日の十一時八分に山陰地方に大地震があつたそうだ
うちへ飛んでかへつて、報知新聞を見ると、地震の事がくわしく書いてあつた、しんげん地は城の崎温泉のそばの宮津といふ所だそうだ、西のはての下関までひゞいたそうで、豊岡、城の崎は、火災を起して城の崎温泉は全滅した
一昨年の大震災に僕等は飲食に大へんこまり、この東京市をやく、火を見て、うらめしく思つてゐた、そうして子とわかれ、親を失ひ、兄弟とはぐれた人が、何人もあつた、その大地震が、関西に廻つて今度の地震を起したのである
震火災にあつた人は今頃何をしてゐるだらう、きつと焼跡や家のいたんだ所をなほすに困り、苦しんでゐるだらう、親と分れた、をさなごや子を失ふた親はどうしてゐるだらう、やつぱり大震火災にあつた僕等のやうに、飲食に苦しみながら、火に追はれて逃げ、寒い風にあたつて、野宿したのであらう
僕はこんな災なんにあつた人に、しんさいの時の御恩返しに、色々ちようほうな物を上げたいと思つている

地震、今頃、野宿のルビに濁点は見えなかった。
第二段落、伝聞の助動詞がさうだではなくそうだと書かれている(二箇所)。この語のかなづかいのゆれを示している。
第三段落のそうしても同様。
第四段落の冒頭、《震火災》は誤植かもしれない(そのあとに《大震火災》とあるので、《大》が落ちているのかもしれない)。

前後を見ると、この「コドモホウチ」は毎週日曜日付（実際にはその前日の夕刊）の紙面にあった。児童作品が載ることもあるが（五月二十四日付では「児童作品／春の巻／青山師範付属小学生徒」〔附属ではない〕だった）、学者の談話記事などの場合もある（六月七日付では「理学博士／石川千代松氏談／「海にも山にも／面白い小動物」）。

児童作品は学校ごとにまとめて掲載されているので、恐らく教員の発意で児童に書かせ、よいものを選んで新聞社に送った――というところか。あるいは新聞社から学校に声をかけるということもあったろうか。自筆年譜の記述では一人で投稿したようにも受け取られかねないが、そうではあるまい。

井口樹生著・藤原茂樹編『池田彌三郎の学問とその後――霊魂信仰のゆくえ――』（発行・レビュージャパン、発売・ブッキング、平成十四年刊）には井口樹生編「池田彌三郎年譜」が載っている。『池田彌三郎著作集』の「自撰年譜」を圧縮したもののようだが、この大正十四年の項は、

五月。二三日、兵庫県北部但馬地方の大地震に見舞文を書き『報知新聞』に載る。

とあたかも五月二十三日に新聞に載ったかのようになっている。五月二十三日は地震のあった日。載ったのは三十一日付である。

大正十五年（数え十三歳）

『池田彌三郎著作集』の「自撰年譜」のこの年の項に、

一月。新聞『萬朝報』が「寅歳の秀才児」という特集を扱い、記事が出た。その折の写真が今手もとにあるものの中で一番古い。

とある（『現代知性全集』の「年譜」にはこのことは見えない）。

たしかに大正十五年一月一日付の「萬朝報」には「寅歳の秀才児」として池田彌三郎が登場しているが、その前にこれを募集する告知から紹介したい。大正十四年十二月三日付の「萬朝報」第七面に「一技一能に秀でた／少年少女諸君を御紹介」〔横組〕、「寅歳の諸君を／どし〳〵御／投書下さい」〔縦組〕という見出しのカコミ記事がある。

△天才を発見するのは、川原の砂の中からダイヤモンドを拾ふやうに尊い、そして楽しい慰みです、わが社は新年早々寅歳の少年の中から、さうした天才を発見して、皆さんと共に楽しむ為めに、左の規程によつて、ひろく応募をもとめます

△答案は一回一人分十五字詰百行前後とし、家庭、学校の関係も書き添へ写真も必要です

△本社は光輝ある諸君の前途を祝福するため精選調査の上これを大正十五年元旦紙上より発表いたします

△当選の少年少女諸君へは永久に記念となる美品を贈呈いたします

△答案は本社内『天才礼讃係り宛のこと』

△締切り　十二月十日

要するにこれは、寅年の天才少年・天才少女の周囲の大人に対して呼びかけているのである。《答案》とはつまり推薦状のことになる。

同じ告知が次の十二月四日付の第五面にも載っていた。

そして大正十五年一月一日の「萬朝報」の第十面と第十一面に「えらばれた少年少女／ことし十三／寅歳の秀才／…勝気な気性がその特徴」と題する記事が載ったのである。

一技一能に秀でた寅歳の天才児を発見しようと試みた我社の企ては、満天下の父兄や先生方の熱心な声援によつて成功しました。

或は一校から五人十人と応募された向も多くありましたが、それは本社で便宜三名以内に限りました。又児童自身で得意の作品を投書された方も多数ありましたが、これは残念ながら全部お預り致しました。

その選に漏れた方も素より一人残らず秀才ですが、紙面の都合や何んかで、已むを得ない事情であつたことを御諒察下さい。

かくて精選に精選し、のこつた宝石を紙上に列べて、この年の始めに読者諸君と共に祝福したいと思ひます。

入選された方は、何れも小学校の五年か六年の男女生です。そして、その推薦文を見ますると、柔和な中にも豪気な、勝気な、進取的気性に富んでゐることも略ぼ一様な特徴であります。

というリードのあと、まず「推賞六十五名／栄冠をかちえた人々」という見出しのもと、

（姓名）	（特長）	（学校）
加藤　元康	理科	鞆絵　小学
岩崎　久雄	絵画	王子　堀内
大島　英義	算術	高　千　穂
岡田喜美子	国語	同　　右
小倉さく子	琵琶	本郷　真砂

……のごとくに並べられ、どういう順序によるものなのかは何の説明もないが、十九番目に、

池田彌三郎　作文　京橋　泰明

と登場する。このあと「びわ界の三天才／御前演奏もたび〳〵」といった見出しとともに（時に顔写真入りで）個人別の紹介記事が続く。池田彌三郎の記事は次の面（第十一面）の右肩にあった（記事冒頭は天ツキだが、そのあと文の途中でも改行し、そこは一字下ゲ、行頭二字は字が大きくなっている。なるべくその体裁を生かして書き写してみたい）。

六年の教科書も
独力で突破
泰明小学五年――池田彌三郎君

天金と云へば誰知らぬものもない江戸の名物『おいしい天ぷらの本場』である。池田彌三郎君はこの暖かい家庭に生れた天才児で、京橋泰明小学校の五年の優等生です〔／〕君は

学校 は何でも得意だが、中でも君の大得意は数学に作文であると。先生が補充問題として提出される算術などは殆ど出来ないものはない有様で、偶ま先生が不在中には、君が問題を自ら作成して、同僚にこれを提出して教へることもある

聞く ところによると、君は既に六年の教科書を突破して、中等学校入学試験問題集中の応用問題をどん〳〵片づけて居るとのことです。次に面白いことは、泰明小学校には自立会と称する自治的の会があるが、これは、

児童 達の規則を定める衆議院である故に、相当に議論も起るさうだが、池田君はこの自立会の領袖をもつて任じ、君の堂々たる論戦振りは同輩を心服せしめると云ふことである。それに彌三郎君はもう二三年前から

日記 を欠かさず書いてゐるとのことに、これには記者もひどく感心させられた。

この記事に写真は添えられていないが、紙面の中央に「推賞の人々」として四十人の顔写真が並べられており、学帽をかぶった池田彌三郎の写真もある。これが「自撰年譜」に言うところの一番古い写真なのであろう。

池田彌三郎の記事の下に「応募十八名に及んだ／四谷の第二小学／いづれも劣らぬ秀才ぞろひ」という見出しの記事

があり、《四谷第二小学校は秀才ぞろひの評判高く、寅年生れの抜群として》……と十八人の名が列挙されている。そして《中で左の三君を特に変つた技能の点において、本社は推賞することにいたしました》と三人についてのみ詳しく書いている。小学校側は十八人送り込み、新聞社がそこから三人に絞ったわけだが、じつは最初の十八人の中に《（五男）江口敢、深谷一郎、片岡忠、井筒俊彦、南豊》……と井筒俊彦の名に接することができた。井筒俊彦は大正三年五月四日生れ、池田彌三郎は大正三年十二月二十一日生れ、ともにこのときは小学校五年生、ともに寅歳の天才児と謳われ、六年後には慶應義塾大学経済学部予科一年の同級生となる。

（当時の新聞はおおむね総ルビであるが、池田彌三郎の作文以外の引用においては、ルビの一部を生かすにとどめた）